

未就学児を対象としたプラネタリウムイベントの期待と効果

宮崎科学技術館
主任主事 大浦 美奈都

【 研究動機及び概要 】

宮崎科学技術館（以下、当館とする）では未就学児を対象としたプラネタリウムイベントを開催している。そこで、来館者増を図るため、他館の幼児向けプラネタリウムの視察を行った。リピーターの確保や、新規のお客様に来館してもらうには、小さい子ども連れのお客様たちが、プラネタリウムを楽しんでもらえるようなプログラムの構成を組み立て、また新たな取り組みの必要性も考える。

はじめに

当館の来館者の客層は未就学児も多く見られ、プラネタリウムの観覧者の中には、「暗くて怖い」とホール内に入らない子や、子どもが泣き出したため途中退場をされる方がいる。そこで、当館では子どもが怖がらないような工夫を凝らした、主に未就学児に対してのプラネタリウム投映（以下、幼児投映とする）を行っている。小さな子ども向けのため、プラネタリウムは怖いところではないと意識づける環境づくり、天文に興味を持つ子どもが増えるような内容づくりを考えている。とても需要のあるイベントの一つとなっており、更なる来館者を増やすため、変化をもたらすことも策の一つと考える。そこで、来館者の意見を集約し、他館の幼児投映の視察を行った。

第1章 幼児投映の実施

第1節 当館の幼児投映の取り組み

当館の幼児投映は、小さな子ども連れの家族にも気兼ねなくプラネタリウム空間を楽しんでもらえるよう、平成25年3月にプラネタリウムの多目的活用の一つとして導入した事業である。当初は「ワクワク♪ワイワイ♪プラネタリウム」という名称だったが、子ども向け投映とわかりやすいように「キッズプラネタリウム」に変更。開催日時や回数等も毎年変遷している。通常投映とは異なり、小さな子どもを対象とするので、子どもにもわかるような解説や、ホール内に少し明るさを残し、BGMも子ども向けの曲を使用するなどの工夫をしている。また、会場内での制限を減らし写真撮影や話をしても良いという、参加しやすい環境づくりを徹底した結果、複数開催を望む声が多く、平成29年度よりキッズアワーを開始。

現在、当館の幼児投映は、星の話のみのキッズプラネタリウム（偶数月・第4木曜の10：00～10：30開催、展示室のみの入館料）と、星の話とプラネタリウム番組を合わせたキッズアワー（原則偶数

月・第4日曜の11:00～11:50開催、プラネタリウム料金込みの入館料)の2つを実施している。来館者数は以下の表のとおりとなっている。

表1 キッズプラネタリウムの入場者数 ()内は団体人数 ※単位:人

	4月	6月	8月	10月	12月	2月	計	平均
H29年度	125 (69)	233 (175)	220 (128)	242 (170)	86 (15)	97 (49)	1003 (606)	167
H30年度	128 (78)	245 (200)	200 (61)	114 (69)	93 (32)	—	780 (440)	156
計	253 (147)	478 (375)	420 (189)	356 (239)	179 (47)	97 (49)	1783 (1046)	162

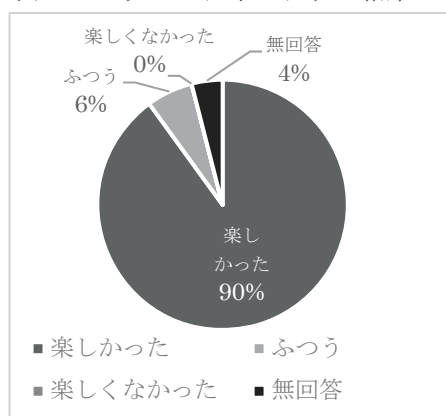
表2 キッズアワーの入場者数 ※単位:人

	4月	6月	8月	10月	12月	2月	計	平均
H29年度	208	245	225	135	229	208	1250	208
H30年度	243	243	229	167	220	—	1102	220
計	451	488	454	302	449	208	2352	214

第2節 アンケート集計と分析

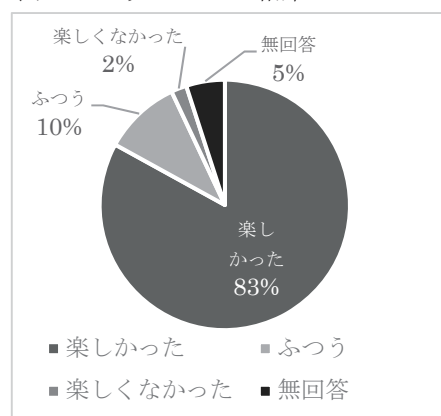
毎回、幼児投映ではアンケートを実施している。表3は平成29年度・平成30年度に実施したキッズプラネタリウムの内容についてのアンケート結果である。表4は平成29年度・平成30年度に実施したキッズアワーの内容についてのアンケート結果である。

表3 キッズプラネタリウム結果



計11回220名を対象にしたアンケート

表4 キッズアワー結果



計11回376名を対象にしたアンケート

どちらの表を見ても「楽しかった」という回答が8～9割となっている。参加型のプラネタリウムで手遊びうたも取り入れているのが好評な理由の一つとして挙げられる。開催数を増やしてほしいという意見も各回のアンケートで見られる。キッズアワーに関しては、表4を見ると「楽しなかった」という回答が見られる。この回答をした参加者のアンケートを見ると、ほとんどが小学生の児童によるもので、話の内容が簡単すぎるという理由だった。キッズプラネタリウムが平日の午前中に開催し

ているのに対し、キッズアワーは日曜開催なので来館者の子どもの年齢層が少し広がったことが原因と考えられる。また、低年齢の幼児には難しすぎるという意見もあった。後半に放映する番組は「しまじろう」「こぐま座のティオ」などの幼児向けに制作されているものが人気だったので、番組の選定も重要だということがわかる。

第2章 他館の幼児投映視察

第1節 他館の実態

この研究を進めていくにあたり、明石市立天文科学館（ベビープラネタリウム・キッズプラネタリウム）と伊丹市立こども文化科学館（ちびっこ投影¹⁾）の幼児投映を視察した。

ベビープラネタリウムは0～4歳くらいを対象としており、金曜の10時から30分間の月2回投映。当日の夜に出ている星座の簡単な紹介と、保護者向けに将来起こる天文現象の解説をしている。

キッズプラネタリウムは幼児や小学校低学年を対象としており、毎週土曜・日曜・祝日の11時10分から50分間の投映。ベビープラネタリウムに比べ、天文学習の要素も入っており、オリジナルキャラクターのちょろすけが登場し、宇宙や星に関するクイズを出題していた。

伊丹市立こども文化科学館のちびっこ投影は幼児や小学校低学年を対象とし、毎週日曜・祝日の10時から40分間の投映。当日の夜空に出ている惑星や星座の紹介をした後に、マスコットキャラクターのひょんたんが出てくるオート番組の上映をしていた。

第2節 当館との比較

放映時刻の設定として、当館のキッズプラネタリウムアンケートには「10時開始は少し早い」という意見も少数みられるが、他館の幼児投映も10時からとなっている。放映内容はどの館も季節に合った星空解説をおこなっている。BGMはジブリやディズニー、おかあさんといっしょ等の曲を使用しており、オルゴール調のものが多く、星を出している間、他館は照明を全て落としているが、当館は星やイラストが見える程度に照明を残している。放映形態は、当館は進行担当と機械操作担当の2人で放映を行うが、他館は1人での放映となっている。

第3節 今後の取り組み

当館の幼児投映は人気のあるイベントなので今後も続けていきたい事業の一つである。怖くない環境づくりとしては、明るさを残した投映はもちろんだが、開場中も今の子どもたちに合わせたBGMを選曲する必要がある。ある館では保育園・幼稚園で使用する曲をリサーチしているところもあるので、当館も団体アンケートを利用して園で歌っている手遊びうたなどを保育士の先生方に聞くことができる。また、他館がしているように幼児投映のなかで、誕生星座を紹介するときには来館した子どもの中から数名選び名前を呼んだりすると、特別感を味わうことができ、天文に興味を持

¹ 伊丹市立こども文化科学館の固有事業名のため“影”の字を使用

つ契機となるのではないかと感じた。

今ある幼児投映の内容は8割以上のお客様が満足しているので、このまま継続して職員のオリジナルストーリーで実施していきたい。しかし、満足していないお客様の意見もあることから、改善していく必要がある。視察した明石市立天文科学館では幼児投映を、ベビーとキッズに分けて開催している。これは、対象を明確にしたほうがお客様が来館しやすいという理由だそうだ。当館の幼児投映に満足していない理由として「低年齢の子どもには難しい」という意見が実際に出ている。そこで、当館でも0～4歳くらいまでを対象としたベビープラネタリウムができないかと考えた。当館で実施しているキッズプラネタリウムのように凝ったものではなく、赤ちゃんも保護者もゆっくり星がみられるよう、解説も簡潔なものにし、1人で投映できるようなプログラムとする。一般的には未就学児の視野は大人の約6割程度しかないことや、視力もあまりよくないことから、星座の位置の考慮や、はっきりしたコントラストのイラストを使うなどの工夫が必要となってくる。現在の幼児投映のように、星の話の最中に手遊びうたなどは取り入れるが、担当職員がステージに立つことはせず、じっくり星を見てもらう時間を多く設けるような投映ができればと考える。

おわりに

当館の幼児投映を通して親子で楽しく星をみた経験から、子どもたちに「星が見たい」「プラネタリウムに行きたい」という思いが芽生えれば、再度来館してもらうことができ、リピーターの確保につながると思う。どうすればお客様に「科学館に行きたい」と思わせるか。プラネタリウムは怖くないところと意識づけ、楽しくわかりやすく天文の話をするのはもちろんである。そして、アンケートにもあった「小さい子には難しかった」という意見があるのなら、そのお客様のニーズに合わせたベビー向けのイベントを提供する必要があるのではないかと考える。「赤ちゃんだから、まだプラネタリウムを見るには早い」と思って来館しない方もいる可能性がある。そういったお客様にも来館していただけるよう、試験的にベビー向けの投映を導入してみることも検討していきたい。